

恋愛台風
4

カシヤ、と響くシャツターの音。

その音がするたびに、緊張と高揚が一緒に膨れ上がる。

極力自然体で、柔らかく、風景から浮かないように。

鈴は視線をほんの少し下げる、足を踏み出した。

シャツターの音は数を重ね、鈴のすべてを寸分違わず記録していくようだ。それは、互いに何も身にまとわざ抱き合う瞬間よりも恥ずかしいかもしれない。

鈴はくるりと体を反転させて、柔らかくて長い茶の髪を搔き上げる。ふわりと浮かぶスカートは重ね着した長めの上着に押さえられ、中途半端に揺らめいた。

「鈴、笑つて」

要望に答え笑みを作るが、どこかぎこちない。

鈴はレンズの先にいる彼を強く意識した。

ファインダーを覗く彼は、きっと真剣な眼差しをしている。自分にしか見せない表情がある。そ

れにどこか安堵すると、自然と笑みがこぼれた。

するとまた、カシャリと音が鳴る。

その音を最後に、本村はカメラを下ろして笑いかけてくれた。鈴もまた、彼に歩み寄りながら、大きな目を細めた。

「……武雄さん、私の写真ばかり撮つて良いんですか？」

いつたん車に戻り、車内でデジタル一眼レフカメラを確認している本村に、鈴がそう問いかける。

鈴の九歳年上の恋人、本村武雄は、部署は違うが同じ会社で働く人間だ。仕事場では穏やかな表情を浮かべ、そつなく、だけど目立たないように仕事をこなしている彼だが、鈴の前では別の一面对を見せる。

そんな彼の趣味がこの写真なのだが、鈴には前々から気になつていたことがあった。

彼は、どんなに景色が良いところに行つても、どんなに美しい建築物を前にしても、必ず鈴を写真に入れる。仕上がりはそれこそ「これは自分だろうか」と思うくらい綺麗なのだが、自分が入つていらない方がもつと綺麗に撮れるのではないかと時折不安になるのだ。

鈴の問いかけに本村は顔を上げ、

「ん、大丈夫」

と、何でもないことのように言う。

「私、風景の邪魔になりませんか？」

「ならないよ。そもそも、鈴の写真撮つてるんだから」

彼は残りの写真をさつと確認してカメラをしまうと、ハンドルを握った。その仕草で、話を打ち切りたがっているのだとわかつたが、やはり納得いかない。

「武雄さんがこれまで撮つた世界遺産の写真には、人物が写つてないじゃないですか」

本村の部屋には世界遺産の写真がたくさんある。

それはどれも人の気配を感じさせないものばかりだ。だから彼は、本来そんな写真を好むのだろうと鈴は睨んでいる。

「私のことは気にせず、好きなものを撮つて良いんですよ？」

彼は自分に気を遣つて写真に入れてくれていいのではないだろうか。それが心配でしようがない。「俺は好きなものしか撮つてないよ？だから鈴を撮つてるんだ。鈴がいればいい、鈴がいなきや意味がない」

さらっと言われた言葉に鈴が目をパチパチさせる。

本村は一拍遅れて自分の発した熱っぽい言葉が恥ずかしくなったのか、「あ、いや」と焦り出した。

「ほら、なんて言うのかな、うん、やっぱり鈴を撮るのが一番楽しいんだよね。だから、気にしないくて良いから。鈴さえ迷惑じゃなければ、これからも付き合ってくれたら嬉しいな」

彼は取り繕うように早口で弁明する。しかし発した言葉は取り消せない。熱烈な告白とも取れる

言葉に鈴の表情がふにゃ、と緩んだ。

言い訳ばかりしていた本村も、嬉しそうな鈴の顔に、うつと言葉を詰まらせて、照れ隠しのつむりか、メガネを上げて正面を向く。

「……まあ、そういうことだから」

「はい」

何だか誤魔化されたような気もするが、本村がそんな風に思つてくれていることに心が温かくなつた鈴は、しつかりと頷いた。

上機嫌の鈴を横目に見ながら本村はふたたびメガネを上げ、頬を搔く。

しかし、ふと何か思い出したように「鈴」と呼びかけてきた。

「はい？ どうしました？」

「あのさ、実は、ちょっとお願いしたいことがあるんだけど」

「お願いしたいこと？」

本村からのお願い事は珍しい。どうしたのだろうと次の言葉を待つていると、彼は運転しながら申し訳なさそうに伺つてくる。

「実は今度、新聞社主催のフォトコンテストがあるんだよ。それに応募してみたいない、と思つてるんだけど、鈴が写つてる写真を出したら迷惑かな？」

「コンテストですか？」

「ああ。そんなに大袈裟な賞じやないんだけどね。去年行つた鎌倉の写真と、あと気に入つてるやつを何枚か出してみたいんだ」

鈴は間をあけることなく「良いですよ」と快諾した。

自分が写つた写真を人に見られるのは気恥ずかしいが、彼の夢を応援したい。何と言つても写真を撮つている時の本村は、生き生きしているから。

その後、夜も更けた頃に彼の自宅へと到着した鈴は、壁に飾られた写真を静かに眺める。

コンテストに写真を出すということは、昔、副業にするほど情熱を傾けていた写真を、また仕事として始めるつもりなのだろうか。

だけど、今の状態では仕事にならないかもしれない。だつて、本村のアルバムは自分の写真で埋め尽くされているのだ。

プロとして仕事をするならば、先ほどのように「好きなものしか撮らない」と言つて、鈴の写真ばかり撮つてはいられない。

何だか彼の言つていることがちぐはぐでおもしろくなり、クスクス笑つていると、本村が写真を眺める鈴の体を背後からスッと抱き寄せた。

「鈴、何笑つてるの？」

「楽しいことを考えていました」

「どんなこと?」

「私はいつでも武雄さんを応援しますよーって」

本村が今後どういった道に進むかはわからないが、どんな道だろうと自分は全力で支えたい。

「何だいそれ」

思考の断片を伝えられただけの本村は意味がわからず首を捻つっていたが、悪いことを言われてるわけではないことはわかったのだろう。「ま、いいか」と言つて体を屈め、鈴のつむじに頬を寄せる。背の高い彼に、低い自分。ぎゅっとしがみつけば、本村の苦笑混じりの吐息が鈴の髪を揺らした。見上げた瞳は甘えを孕んでいて、自分よりもずっと大人な本村が求めてくれていることに体が熱くなる。

鈴は顎を上に傾け、そつと目を閉じた。すると、灯りを遮る影が顔に落ち、唇に柔らかなものが触れる。まずは優しいキスだ。

小鳥のようなついたままを繰り返し、くすぐったさに口角が上がったところで本村が唇のラインを舌でなぞつた。そのまま舌が口内に入り込み、鈴の舌に摺り合わされる。鈴も舌を絡ませ、心地よさにしばらく身を任せていると、それでは物足りなくなつた本村が鈴の腰に腕を回し、軽々と抱きかかえた。

「きやっ！」

慌てて本村に抱きつくと、彼は「ごめんね」とどこか切羽詰まつた声でつぶやき、鈴をベッドに

押し倒す。

スプリングで弾んだ体を抱きしめながら、本村は先ほどとは違い、荒々しく唇を押し当ててきた。貪るような、飲み干すような、激しいキスに鈴の呼吸が乱れていく。

彼の大きな手は鈴の胸に食い込み、密着させた体からは彼の欲望が膨らんでいくのが、ありありと伝わってきた。

「好きだよ、鈴……」

本村はメガネを外して上着を脱ぎ捨てると、今度は鈴の服に手をかけた。

性急な動きにボタンが飛びそうになるが、それを咎めることもなく本村の好きなようにさせる。スイッチが入るといつもこう。

鈴の服も下着もすぐに剥ぎ取られ、ベッドの下へと放り投げられた。

「糸まとわぬ姿で一人きり。本村はもう一度キスをしてから、鈴の体を唇でなぞつていく。大きな手が鈴の胸を揉みしだき、頂きを吸い上げた。

「あ……っ」

敏感に体が反応する。本村は鈴の声をさらに引き出すべく、赤く染まつた頂きを柔らかく噛み、刺激する。しかし、それでは物足りなかつた。

「武雄さん……っ、私、私……」

「うん、どうしたの?」

さっきまで余裕なく衣服を剥ぎ取っていたくせに、鈴の苦しげな声に気をよくしたのか、余裕の笑みを浮かべる本村。

鈴は、うつと言葉を呑み込み、視線を彷徨さまよわせる。

自分ばかり気持ち良い思いをするのは嫌なのだ。本村にだつて、気持ち良くなつて欲しい。この快感を分かち合いたい。

「私、もう、欲しいんです……」

鈴は顔をそらしたまま、そうつぶやいた。

「え」

「武雄さんが欲しいです」

自分から求めるなんてはしたないだろうか。だけど素直な気持ちなのだ。鈴はそらしていた視線を怖々と戻す。

すると、大きく目を見開き、硬直している彼がそこにいた。先ほどまで浮かべていた笑みも消えている。

「……武雄さん？」

「……」

「武雄さん？」

「あ、ごめん、いや、その、そんなストレートに言うとは思わなかつたから」

我に返つた本村は、ぱつと口を押さえて俯うつむいた。薄暗い部屋では確認しづらいが、どうやら赤面しているらしい。

なんだかそれが可愛くて鈴は思わず笑顔になる。笑われた本村が何か言おうと口を開いたが、今は何も言えないと判断したのか、そのまま肩を落とした。

「武雄さん、可愛いです」

「褒め言葉だとはわかつてるけど、俺もう三十代だよ……？ 可愛いってガラじやないって」

「でも可愛いです」

うなだれたままの本村をぎゅっと抱きしめると、本村も諂あきらめたように抱き返してくれた。それだけで幸せを感じる。このまま抱き合つて眠つても良いかも知れない。

しかし、そんなことを考えていたら、本村がベッド脇の棚から避妊具を取り出して、「ダメだよ」とささやいた。

「これだけじゃ、終われない」

その一言で、先ほどまでの情熱的な彼に戻る。

可愛らしかった姿はすつと消えて、今は男の顔。鈴は服従を示すようにベッドに横たわり、彼の準備が整うのを待つた。

「……あ、ああっ！」

やがて、避妊具を装着した彼が無遠慮に鈴の中へと侵入してくる。

圧迫感に体をのけぞらせ、固く目を閉じるが、まだ呼吸が整わぬうちにズン、と強く打ち込まれ悲鳴を上げた。前戯が短かつた上にインターバルもあつたせいで、鈴の体には潤いが足りない。本村も苦しげに眉根を寄せている。

「すごくキツイね。大丈夫、鈴？」

気遣う声に鈴は首を縦に振る。たしかに苦しいが、我慢できないほどではない。それに、折角繋がり合えた彼が離れていくのは嫌だつた。

「このまま、このまま抱いて下さい……っ」

懇願する鈴に本村も覚悟を決めたようで、そのまま抽挿を開始した。

激しい打ち込みに鈴の小さな体がずり上がりしていく。それを何度も引き寄せて、本村が最奥を目指すのだ。次第に鈴の体から愛液が溢れ出し、それが潤滑油となつてますます中へと招き込む。

「あつ、あつ」

擦れ合う感触が気持ち良くて、頭がおかしくなりそうだ。それは本村も同じだつたらしい。「は、つく……っ」

もはや言葉を紡ぐこともできず、ただひたすら鈴の体を求めている。

「ダメ、武雄さん、私、もう……っ！」

甘い痺れが体を包み、絶頂に達する。

「鈴……っ」

脳天まで突き抜けるような快感に鈴が体を縮めたと同時に、本村も欲望を昇華させた。

すべてが終わり、荒い呼吸だけが部屋に響く中、先に落ち着きを取り戻した本村が、鈴の頬に張り付いた髪を払いのけてくれる。

「……俺は、君が傍そばにいてくれたら良いんだ。それだけで良いから……」

彼は突然、まるで祈るようにそうつぶやいた。

どうして急にそんなことを言いだしたのか鈴にはわからなかつたが、その言葉に当たり前のよう

に頷く。

だつて自分もずっと本村の傍にいたいから。

彼と一緒にいると心が温かくなるから、安心するから。

何よりも、彼のことを愛しているから。

いつの間にか強くなつた本村への愛情。彼のためならどんなことだつて耐えられる。

——まさかその想いが裏目に出る日が来るなんて、この時はまだ、思いもしなかつた。

本村と出かけた翌週月曜日、昼休みに社員食堂で一人、弁当を食べていた鈴に、珍しく同期の基山知子が声をかけてきた。彼女も本村と同じく人事部所属。鈴と本村の仲を取り持った張本人でもある。

その姿はアジアンビューティーとでも言うべきか。長い黒髪をキリリと結い上げ、どこか鋭利にも見える整った表情が、彼女の美しさをいつそう引き立てていた。

「鈴さん、隣良い？」

「珍しいね、知子さん」

「たまには一緒にランチも良いでしょ」

そうは言つても基山のトレーの上にはサラダだけ。相変わらずの菜食主義に、彼女の体が心配になる。

「知子さん、栄養が偏つて体壊すよ」

「入社してから今日まで、風邪一つ引いたこと無いんだけど」

食事の大切さを説こうとした鈴だが、基山の健康アピールに口ごもる。たしかに入社してから今

日まで一度も基山が休んだなんて話は聞いたことがない。

風邪はもちろん、インフルエンザが流行った時だって、基山はいつもと変わらず元気だった。

一方鈴は、食事や健康管理に十分気を使っているにもかかわらず、貧血気味たつたり、体調を崩したりすることが多い。

「……加藤さん心配するよ」

加藤とは、基山の恋人の名前だ。

「心配させときや良いのよ。向こうが勝手にしてるんだから」

攻め方を変えようとも口が立つ基山に勝てるはずもなく、鈴は、「でも体には気をつけてね」と最後にひと言だけ言つて会話を打ち切つた。鈴が掲げた白旗に基山も会話を終了させてサラダを口に運び、鈴もそれに倣つて黙々と箸を進める。沈黙が苦にならない友人というのは気が楽で良い。「そういえばさ」

「うん？」

先にサラダを食べ終えた基山が今度は野菜ジュースを飲みながら、「最近どう?」と問い合わせてきた。

「どうって、あの人と?」

職場で本村の話を持ち出すなんて珍しいながら確認すると、基山が何故か息を吐く。今の言葉だけで答えを手に入れたような、そんな表情を彼女はした。

「上手くいってるっぽいわね。良かった」

「うん。上手くいってるけど……？」

どうしてそんなことを聞くのかと疑問を浮かべる鈴だったが、基山はジュースを飲み干しサプリメントを摂取すると席を立つ。

「あれ、もう行くの？」

「新人研修の詰めがあるの。嫌になるわ、人の世話をするのは嫌いなの。それに佐藤係長って苦手なのよ」

もうすぐ新年度が始まる。これから新入社員が入ってくる。そして、最も忙しくなる人事部で新人指導を仕切っているのが、捉え所のない人事部の麗人、佐藤だった。

今年から新人指導に抜擢された基山は、彼と組んで仕事をすることが増えたようだが、何でもそつなくこなすタイプの基山も佐藤には苦戦しているらしく、弱気な表情が垣間見える。

そうは言つても与えられた仕事は的確にこなす基山だ。必要なことは伝え、間違つたことは指摘し、なんだかんだで上手く指導するに違いない。

「じゃあ知子さん、仕事頑張ってね」

「ええ。鈴さんも無理せずに。何かあつたら声かけるのよ」

「あ、うん」

基山はそう言い残し、颯爽と食堂から去つていった。社内でも美人と名高い彼女の背中を、男性

社員も名残惜しげに見つめている。鈴はそんな男性社員を眺めながら、まだ少し残っていた食事を口に運びつつ首を傾げた。

どうせなら時間がある時にでも話しかけてきたら良かつたのに、どうして忙しい合間を縫つてわざわざ今、話しかけてきたのだろう。

何か彼女に心配をかけてしまうことでもしただろうかと考えるが心当たりはなく、鈴はさらに首を捻りながら残りの食事を口の中へと放り込んだ。

その日の仕事終わり。鈴はいつも通り、駆から徒歩で家に向かった。途中、近所のスーパーに寄つて安い食材を購入する。買い物袋を提げながら今日の献立をあれこれ考えて歩いていると、いつの間にかマンション前に着いていた。

鈴のマンションは少し古いタイプでオートロックではない。しかし、二十三区内で3LDKに一人暮らしというのは、かなり広々とした間取りだ。当然家賃も高い。

鈴は同年代の女性に比べれば稼いでいる方だが、それでも収入のほとんどが家賃に消えていた。友人達は皆、もつたいないと口を揃える。しかし、質素儉約で自分にお金を使うことがない鈴が、住宅にだけは投資するのに理由が二つあった。

まず一つ目、単純に広い部屋に憧れていたから。

そして二つ目、これは今まで付き合ってきた男達に由来している。

鈴が付き合ってきた男達は金にだらしのない者が多く、なにかにつけて鈴に金をせびつていた。人の良い鈴はどうしてもと言わると断ることができず、手元にあるお金で渡してしまう。結果、給料の大半を彼氏達に注ぎ込むことが多かつた鈴は、高めの家賃を払うことで、自分にも投資していると思いつたかったのだ。

しかし紳士的な本村と付き合つようになつた今、もうその必要はなくなつた。

大きな部屋も満喫できたし、この家は引き払つて手頃な部屋に引っ越しても良いかもしない。できれば本村の家の近く、徒歩で通える距離。そうすれば平日も気軽に彼の家に行くことができるから。

そんなことを考えているうちに部屋の前に辿り着いた。バッグから鍵を取り出した鈴は、夕飯をどうしようとを考えながらドアを開ける。それはいつもと変わらない光景だつた。

そう、たしかにこの瞬間までは。

鈴が家に入ろうとした瞬間、突然どこからか忙せわしない足音が響いた。鈴は何とはなしにそちらへ視線を向ける。すると、廊下の影から誰かがこちらに向かつて駆けてくるのがわかつた。一体何事だと考へるよりも早く、鈴の視覚は相手を認識する。

暗闇の中に浮かび上がる金髪に、鈴は一気に血の気が引いた。

「……どうして!?」

目にかかる緩いペーマ、その奥に潜む冷たい三白眼。

その目が鈴を、いや、鈴の手の中にある物を鋭く捕らえる。鈴は反射的に家の中に逃げ込もうとした。しかしもう遅い。彼はあつという間に鈴との距離を詰め、手の中にあつた鍵を強引に奪い取つて鈴の口を塞いだ。

「んんっ！」

「声を出すな」

彼は鈴を押さえつけたまま、引きずり込むようにして家中へと入る。勢いに負けて玄関に倒れ込んだ鈴は膝を打ちつけ、痛みに顔を歪めた。そうしていの間にも、男の手で鍵とチエーンがかけられる。

「……っ」

カチ、と電気のスイッチが入り、玄関口を灯りが照らした。

浮かび上がる無法者。その男を鈴は知つてゐる。鈴は信じられない思いでその名を呼んだ。

「亘太……！」

見間違ひようもない、その髪、その顔、その体躯。鈴が付き合つてきた中でも最も苦しめられた、峰亘太だ。

呆然と見上げる鈴に、峰は口角を上げる。

見下すような冷笑に思わず背筋が凍りつき、助けを求めるべく咄嗟に手を伸ばした携帯電話は、

鍵と同様、あつという間に奪われてしまつた。

「……よ、鈴。会いたかつたぜ」

笑つているのにどこまでも冷たい眼差しは、今までの平和な日常が食い荒らされていく予兆。鈴は驚きと戸惑いに胸が押しつぶされそうになりながらも立ち上がり、足を引く。

「な、何しに来たの……！」

「奥に入れ、鈴」

彼は鈴の言葉には応えず、顎で指示を出した。

「帰つて……！ 今さら亘太と話すことなんか何もない！」

「鈴」

声を荒らげる鈴に彼は酷薄な笑みをしまうと、不機嫌な表情で繰り返す。

「奥に入れつつてんだよ。何度も言わせんな」

男運がなく、何人ものひどい男と付き合つてきた鈴だが、その中でも峰の傍若無人つぶりは群を抜いていた。付き合つた期間は数ヶ月と短いが、下手に逆らえばどうなるかは、鈴の体が覚えている。逃げだそうにも鍵は閉められチエーンもかけられてしまった。

（武雄さん……）

鈴は峰の顔を一度見て唇を噛みしめ、先ほどの彼の言葉に従つて奥へと足を踏み出した。峰も後に続いてくる。一体何故ここに峰がいるのかわからないが、良くないことが起きるのは火を見るよ

り明らかだ。

「何しに来たの？ お金？」

思い浮かんだのは、やはり金のことだつた。

アクセサリーや洋服、ゲームにヘルス、それだけではなく競馬やパチンコなどの賭け事も好きな峰は、湯水のように金を使う。

付き合つていた時も顔を見れば金をせびられ、通帳から百万近く引き出されたこともあつた。結局峰にいくら注ぎ込んだのか、考えただけでも頭が痛くなる。

背後に立つ彼は、「お前は話さなくて良いんだよ」と吐き捨てた。この場の支配者はあくまで自分であつて、鈴には何の権限もないのだと言いたげに。

リビングに入ったところで、峰が「こっち向け」と命令した。いつの間にか額に浮かんでいた汗を拭つて、鈴は彼を振り返る。

耳には無数のピアス、首と指にはゴテゴテのシルバーアクセサリー。いつ見ても風景に馴染まない金髪に、カラーコンタクトをしているのだろうか、瞳の色は毒々しいほどの赤だ。年は鈴の一つ上で、その体は、あばらが浮き出るほど痩せていることを鈴は知つていて。

彼が基山の恋人、加藤と同じ運送会社に勤めていたことが出会つたきっかけであり、運の尽きでもあつた。加藤はいまだにそれを鈴に詫びてくる。

「……どうして來たの」

峰は答へず、鈴の携帯を開くと、勝手にチェックし始めた

「亘太、止めてよ！」

「痛い目見たくなかったら動くな」

取り返そと伸ばした手を峰が乱暴に払いのけ、尊大な態度で言いつける。心落ちつくはずの自宅が逃げ場のない密室となり、言いようのない不安が鈴から少しづつ冷静さを奪つていった。

「ねえ、どうして来たの？ 何が目的なの!? なんで、どうして今さら……」

鈴の携帯を弄つていた峰は、やがて何かを確信したように目を光らせて携帯を閉じ、携帯を玄関の方へと投げつけた。鈴が誰かに連絡できないようにするためだろう。

「なあ、鈴」

そして、彼は予測だにしなかつたことを言い出す。

「ヨリを戻そうぜ」

身勝手すぎる言葉に、鈴は呆気にとられた。

「な、何言つてるの？」

辛うじて返せたのはその一言。しかし峰は「マジだけど?」と鈴が望まぬ返答を口にする。

「お前と別れてさ、ようやくわかつたんだわ。どんな女よりも鈴が一番良いつてな」

峰はジーンズのポケットに手を突っ込みながら、鈴に歩み寄る。そして、体を屈めて顔を近づけながら言つた。

「色々融通効かせてくれるし、金くれるし、すぐに抱かせてくれるし」

それは、峰にとつて誉め言葉だったのかもしれない。しかし鈴の目にはあまりにも痛い言葉だった。「止めてよ！」と取り乱し叫ぶと、峰はその反応が意外だつたのか、近づけていた体を起こし、首を傾げる。

「はあ？ 今さらなに純情ぶつてんだお前。何だつてしてくれただろ、ソープ嬢みたいにさあ」「！」

「マグロで反応は全然面白くないけど、小さいからか具合も良いし、男イかせんのめっちゃ上手いし。さすがいろんな男喰つてきただけあるよな」

卑猥な言葉に顔を背け、耳を塞いだ。そんな昔の話、聞きたくない。

「はあ、何？ お前、マジでちょっと会わないうちに路線変えたわけ？ いつも大安売りの体だつたじやねえかよ」

鈴は彼の言葉に体が震えだした。たしかに峰と付き合つたのも、強引に押し倒され、勢いに流され、安いに關係を持つたことが始まりだ。

付き合つてからも求められれば相手をしたし、早々に満足させるため、いろんな術^{すべ}を利用したのも事実。それらすべての「事実」が今、鈴の心を攻撃する。

そんな鈴を見て峰はニヤリと笑い、鈴の肩に腕を回してきた。

「とにかく、そこらの女は、ほんつと口うるせえのな。あれはダメ、これはダメ、何様だつての。

その点、鈴は言うこと聞くし、便利だし、金持つてるし。お前みたいな女どこにもいねーよ。だからヨリを戻そうぜ」
傲慢に言い放ち、鈴の顎を掬い上げる。そのまま当然のように唇を押し当てようとしたので、顎を背け彼から逃れた。

「私、付き合ってる人がいるの！だからこんなこと止めて！」

人の都合をまつたく聞こうとしない峰に、鈴はそう言い放つ。本来であれば、その言葉一つですべてが終わるはずだ。なのに峰は表情を変えることなく、「知ってるよ、『モトムラタケオ』だろ？」

と言った。

まさか峰の口から彼の名前が出てくるなんて。

しかしすぐに、今の今まで彼が携帯を見ていたことを思い出す。メールの内容から本村が恋人だと気付いたに違いない。

ところが峰は、さらに言葉を付け加える。

「ダチなんだよ、俺。本村サンと」

「……嘘！ 適当なこと言わないで！」

鈴は即座に言い返した。本村のような人間が、峰と友人なはずがない。なんて強引な嘘をつくのだろうと思うと同時に、嘘を見破れたことで、鈴の心は冷静を取り戻そうとしていた。

しかし、だ。

「鈴が知らないだけだろ。俺、ハロウインの時に相談されたし」

峰はふたたび鈴の顎を掴み、自分の方へと顔を向かせる。

「ガキっぽいことが好きな女に付き合うのは苦労するって話してたぜ、本村サン。『別れることができたら楽なんだけど』、ともな」

峰は鈴の目を覗き込み、低く笑つた。

「ハロ、ウイン……」

まったく心当たりのないことならば、どれ程良かつただろう。

けれど鈴の脳裏には、昨年十月に二人で開いたハロウインパーティーが思い浮かんだ。たしかにその時、鈴は本村に子供っぽい提案をした自覚がある。

信じられなくて、信じたくない、鈴は顎を固定されたまま小さく首を横に振る。

「嘘じやねえよ。ああ、そうだ、お前、本村サンにでつかいキャンディーをねだつて買ってもらつたろ？ どうだ？ 忘れたか？」

鈴は大きく目を見開き、峰を見つめた。今、彼が言つたのは、紛れもない事実だつたからだ。この話は、誰にもしていいはずなのに。

「鈴はズレたところがあるから、あの人も振り回されてホント可哀想だぜ。眞面目で律儀な人なのにさあ」

的外れなことであれば、突っぱねることもできたのに、峰の言葉には、どれも心当たりがある。

そんなのは嘘だと叫べる自信が、鈴ではない。

「本村サンがどれだけ無理してお前に付き合つてやつてるか知らねえから、のうのうとしてられるんだ。大体、お前は本村サンに釣り合つてねえよ。あの人、結構良い家の出だろ?」

またしても、赤の他人であれば知らないだろうことを言われ、鈴は震え上がった。

「どうして、知ってるの……?」

「ダチだからな」

峰の指先が鈴の頬に触れる。次々に零れ出す言葉に体がすくみ、鈴はその手を払うことができなくなっていた。

「だけどお前はどうだ? 父親はお前が生まれる前に母親のことを捨てて、他の女とさつさと逃げちまつただろ。母親は母親で何度も再婚を繰り返して、今は夜のお仕事だ。その上、お前は貧乏暮らしが染みついて、自分に金をかけねえ。いい女は自分磨きに金を注ぎ込んで、どんな時でも綺麗にしてるっていうのによ。その辺、俺でさえうんざりだぜ。生活水準がもっと高い本村サンが見たら、さらにもうんざりだらうな。……なあ、お前、本村サンと釣り合つて、本気で思つてるのか?」

峰の手の平が鈴の頬を覆う。

ざらついた手の感触で、肌が痛い。

「どうせお前のことだ、本村サンに生い立ちを話してねえんだろう? 話せねえよなあ、コンプレッ

クスだもんなあ? だけどな、金持ちってのは相手の家庭環境見て結婚決めるくらいこだわるんだよ。確実にアウトだぜ、お前。なのに黙つて付き合つてなんて、騙^{だま}してるも同然だ」

本村を^{だま}しているつもりはなかつた。だけど、その生い立ち故に実家の話を避けていたところはあるかもしれない。途端に罪悪感が湧いてくる。峰はさらに捲^{まき}し立てるよう^まに言つた。

「なあ、鈴、俺は親切で言つてるんだぜ? 遅かれ早かれ、お前は捨てられるんだよ」

「捨て、られる……」

「今までそうだったようにな」

今まで幸せすぎて忘れていた。付き合つてきた男達が、みんないつだつて鈴を散々利用し、自分勝手に捨てていつたことを。

だけど本村は違うと思いたい。ただ一人、本村だけは。思いたいのに――

「鈴、お前あの人にベタ惚れなんだろ? 辛いぞ、このままいつて、こっぴどくフラれて捨てられるのはさ。だから自分から別れを切り出せよ。あの人も、お前と別れたいのにずっと我慢して付き合つてくれてるんだ。もういい加減、解放してやつてもいいんじやねーか?」

峰は鈴の額に唇を押し付けてから、ドンマイとでも言いたげにトン、と肩を叩いた。

「そのあと、お前みたいなつまらない女と俺が付き合つてやるつて言つてんだ。感謝しろよ。いいか、いつまでも夢見てんな、身の程をわきまえる。本村サンには釣り合わねえんだよ、お前みたいな女。すべてにおいてな」

蛇のように人を鋭く捕らえる三白眼が、染しげに細められる。

「本村サンに俺とダチかどうか聞いても良いけど、あの人話さないと思うぜ。とりあえず、考えておけよ。どんだけ自分が馬鹿なことやつてるか、な。いい加減目を覚ませ、バーカ」

そう言つて、峰は鈴に背を向けて家を出て行つた。玄関のドアが閉まる音が聞こえた瞬間、鈴はその場に崩れ落ちた。

頭が痛い、気分が悪い。汗が滲み、目頭は熱くなり、震えも一向に収まらず、吐き気さえ催した。あまりにも突然、その上、考えてもみなかつた言葉の数々を浴びせられて混乱している。頭を整理しようにも、何から手をつけたらいいのかわからない。

それに、冷静になつて考えてしまつたら、どんな答えが導き出されるのか——想像するだけでも息が止まりそうだつた。

鈴は頭を押さえて目を閉じる。

思い出すのは過去の自分。峰が言うように、自分は本村に胸を張つて話せる人生を歩んではいない。家庭環境は誉められたものではないし、男性遍歴も恥ずかしいことばかりだ。目立つて綺麗なわけでも、教養があるわけでもなく、女性としての魅力が自分にあるのかと問われば黙り込んでしまう。

一方、事情はわからないが本村は元々貿易会社の跡取り息子らしいし、国内屈指の有名大学も出

ている。付き合つていて、彼の育ちの良さを感じたことも何度かあつた。釣り合わないと言われれば、たしかにそうだろう。

峰と本村にどういった繋がりがあつて交友関係を持つてているのか、鈴にはわからない。しかし、親しくなければ知り得ない情報を、峰はたしかに持つていて。

もし峰の言うことがすべて本当なら——

「捨て、られる……私が武雄さんに、捨てられる……？」

本村だけは違うと思っていた。いつも優しく深く愛してくれて、独占欲が人一倍強い、そんな彼だから、今までのような哀しみは起きえないだろうと思っていたのに。

昔、鈴を捨てていつた男達の姿が思い浮かび、そして消えていく。別れるたびに、どうして自分が捨てられなければならないのかわからなかつた。そ、わからぬのだ。それは、本村に關しても当てはまるのかかもしれない。本村も、もし同じように自分を捨てたらどうなるか。それを想像しただけで絶望的な気分になる。耐えられない。彼の口から別れの言葉なんか聞きたくない。だけど、もし、今も本村は鈴を気遣つて無理して付き合つてくれているのだとしたら……。

峰の言葉はあてにならない、全部嘘だと跳ね返すことができればいいのに、いつも最悪の事態を想像してしまうのが、自分という人間だ。前向きに見えるようでいつもしる向きな鈴は、これだけの証拠を突きつけられて嘘だと笑つていられなかつた。鈴は何とか立ち上がり、心許ない足取りで廊下に落ちていた携帯を拾い上げる。

本村は本当に峰の友人なのか、その上、峰に自分の愚痴をこぼしていたのか、そして自分を捨てようと思つてゐるのか、事の真相をすべて聞きたい。

だけど聞いてしまつたが最後、すべてが終わつてしまふような気がする。

今日の出来事が夢であればいいのにと思いながら、本村と付き合つていたことこそ、自分にとつては過分な、淡い夢だつたのかもしれない、鈴は一人大粒の涙をこぼした。

3

翌日火曜日、出社するとすでに仕事の準備をしていた城崎が、パツとこちらを向いた。鈴は即座に顔を伏せ、隠れるように自分のデスクにつく。いつも通りを気取つて仕事の用意をしながら城崎をチラリと窺うと、彼はもうすでに視線を外し、自分の作業に没頭している、よう見えた。

しかし、自分を捕らえた眼差しが、一瞬光つたような気がする。

幼なじみというものは恐ろしいと思いながらも、彼に気付かれたことを察する自分も何だか怖かつた。自分もまた、彼のことをよく知つてゐる。

「なんかあつたか？」

案の定、仕事の合間にふらつと城崎が歩み寄り、そう尋ねてきた。

何故、何でもわかつてしまふのだろう。予想を違えぬ城崎の行動にそうつぶやこうと思つたが、ここで言えば公私混同か。沈黙の時間が増えるだけ、彼に心配をかけるのはわかつていたので「昨日、嫌なことがあつた」とだけ伝える。

城崎は周囲に視線を送つてから、今度は小さい声で、

「あの人にはちゃんと相談したのか？」

と尋ねてきた。

まさかここで本村のことを言われるとは思つていなかつたため、動搖に顔を背けてしまう。あまりにもわかりやすい態度に、城崎は詫しげな表情を浮かべた。慌てて取り繕おうとしたが後の祭り。城崎はもうすでに「嫌なこと」が本村に関係していることを察したようだ。

しかし、いい加減、人の目も気になつてきたのか、鈴の背を軽くポンと叩いてデスクに戻つていく。それから間をあけずに、携帯にメールが届いた。確認すると城崎からで、短く一言だけ書かれてゐる。

『今日、飯食いに行くか？』

城崎がこうやつて相談に乗つてくれるのは、鈴が限界に近い時だ。そんな彼の態度から、自分がどれだけダメージを受けているか実感しながら、鈴は返事をした。

『ちよつとだけ、良い？』

いまだ混乱したままの鈴は、何をどう相談すればいいのかわからない。

しかし、自分で処理するには事が大きく、胸が痛みすぎて先に進めないから、城崎に話を聞いて貰えるだけでも落ちつくかもしれない。そうだけ罵倒されても、泣いたり喚いたり一人で叫ぶうちに何とか消化することができるのに、本村とのことに関しては、ただただ打ちのめされて、哀しくなっていく。

そもそも、今まで相手に問題があつたが、本村との件に関しては、大抵自分が原因だ。配慮が足りなかつたり彼の気持ちに思い至らなかつたりというのが、これまで不和になつた時の理由だつた。それが、鈴にさらなる重圧をかける。

パソコン画面に浮かぶ文字を見つめながら、やはりすべてが夢だつたらいいのにと思わずにはいられない。本村に捨てられることは、恐怖以外の何ものでもないのだから。

終業後、初めは外食の予定だつたが、鈴の沈痛な面持ちに事の重さを悟つたのか、城崎は自分の家に招いてくれた。城崎の家に来るのは久し振りだ。

「上だけ着替えて良いか？」

部屋に入ると、城崎がネクタイを緩めながらそう尋ねる。

「あ、うん、いいよ」

視線をそらすと、城崎は背広を脱いでハンガーにかけた。

小さい頃からお互いの家に泊まり、プールや海にも行つた間柄だ。狭く静かな部屋で、ネクタイを外す音やシャツを脱ぐ音が聞こえるが、とくに何とも思わない。

「ピザでも頬むか。そつちの棚にチラシをまとめてるから好きな物選べ」

城崎にそう言われ、鈴は棚に手を伸ばし、綺麗にまとめられたチラシを手に取つた。こういうところは昔から几帳面なんだよなと思いつつ、城崎が着替えていることを忘れ、彼に視線を向けてしまう。

ちょうど、ワイシャツを脱いだ城崎の体が目に飛び込んだ。

タンクトップ姿のしなやかに鍛えられた背中。鈴は無意識のうちに彼の左肩に視線を走らせた。視線に気が付いた城崎が、こちらを振り返る。

「見せもんじゃねえぞ」

「わ、わかつてるよ！」

鈴は顔をそらし、チラシに視線を落とした。

「隼人には、丼物が良いでしょ？」

「昼に牛丼食つたから他のもんで良いぜ」

机の上でチラシを捲り物色するが、どれも美味しそうなのに食指が動かない。あれこれ迷つていると、着替えを済ませた城崎が鈴の正面に座つて、宅配ピザのチラシを取つた。

「ピザで良いだろ。シーフード頼んでやるから」

そして、鈴の返答を聞くことなく電話をかける。

(覚えてるんだな)

その行動に、鈴は数年前のことを思い出した。上京して間もない頃、金欠だった鈴に城崎がピザを奢ってくれた日のことだ。宅配ピザを頼んだことが無かつた鈴は、それがとても豪華なご馳走に見えて喜んだことを今でも覚えている。

そして、その時頼んだシーフードピザを食べながら、「美味しい」と繰り返す鈴に、城崎が口角を上げていたことも。彼はあの時のことを忘れずに、こうやって頼んでくれたに違いない。

城崎とも色々あつたが、こうやつて重ねてきた年月が、これからも変わらず今のまま一緒にいるだらうことを証明している。

だけど本村はどうだろう。

本村のことは好きだ。それは疑いようがない。

しかし、これまでの人生でさらした醜態のほとんどを見てきてもなお、鈴と付き合ってくれている城崎と本村は違う。峰の言う通り、たくさんの「釣り合わない部分」を持っている自分を、本村はどう思うだらうか。

長い間沈黙していたと思う。ふと顔を上げて隣を見ると、城崎はチラシを片付け寝転がっていた。彼は鈴の意識が自分に向いたことに気が付いて起き上がる。

「話は飯食つてからにしようぜ」

彼はそう言うと「早くこねえかな、腹減った」とドアに視線を向けた。

鈴に重圧をかけることなく、当然のように適度な距離を保つてくれる城崎に胸が熱くなる。思わず彼に手を伸ばし、その服をぎゅっと握りしめると、城崎が「どうした?」とこちらを向いた。

「隼人にいは、私のこと、好き?」

問い合わせに城崎は目を開くと、すぐに眉をひそめる。

「今さら好きも嫌いもねえだろ」

それは突き放すわけでも引き寄せるわけでもない言葉。それなのにひどく安心するのは何故だろう。

「……どうやつたら武雄さんと、隼人にいみたいな関係に、なれるんだろ」

「はあ? お前と本村さんは付き合つてんだろ。俺らみたいな関係になつてどうすんだよ」

鈴の体が小さく震えたことに城崎は表情を濁して、頭をわしやわしやと撫でた。

「つたく、何だよ、本村さんに何か言われたのか? 鈴にベタ惚れっぽいし、何も言わねーだろ。何をそんな不安になる必要があるんだよ」

おら、と城崎は鈴の頬に手を添え顔を持ち上げる。

「話し出すと飯食わねえくせに、仕方ねえなあ……。なんだ、何があつた? 話しちまえよ聞いてやつから」

至近距離にいる城崎と目が合った瞬間、鈴の視界はじわりと滲んだ。

「昨日、来た？」

「来た？ 誰が？」

「こ、亘太が……」

その名前に、曇つた表情を浮かべるばかりだった城崎の顔が、一気に険しくなり、「何だと」とつぶやく。

「峰の奴が来たのか。お前、大丈夫だつたのか、それ!?」

「亘太が武雄さんと友達だつて言つたの……！ それで、武雄さんは私と無理して付き合つてるんだつて、そう言うの……！」

「はあ、友達い!? ちょっと待て何の話だ、んなわけねーだろ！ あの人、職場じや人当たり良いふりしてるけど、人を見る目は滅茶苦茶厳しいじやねえか。よりもよつて峰みてえなやつダチな訳ねえ！」

「だつて亘太、武雄さんのこと色々知つてたんだよ！ 友達じやないと説明がつかないことだらけなんだよ！」

城崎の否定の言葉を、鈴はさらに強く否定する。鈴のあまりの剣幕に城崎が珍しく口を閉じ、困惑したように首を掻いた。

「昨日あつたことを全部話せ。話はそれからだ」

それから、鈴は昨日あつたことを城崎に話した。話が散らばつたり、沈黙のまま時が流れたり、感情的になりすぎて聞きづらいことこの上なかつただろう。

それでも、いつも短気な城崎は黙つて耳を貸し、鈴の言葉から昨日あつた出来事を正確に把握していくつているようだつた。

話を終えた後、城崎は何かを思案するように頬杖をついて黙り込む。

鈴も吐き出すことでスッキリした部分と、事実を再認識させられ、打ちのめされた部分が複雑に混ざり合い、言葉が紡げない。

やがて長い沈黙の果てに城崎が鈴に視線を移し、「鈴」と呼びかけてきた。

「正直、峰とダチで、峰にそんなこと言つてると、俺は本村さんのこと信用できねえ」
彼が吐き捨てたのは、本村を否定する言葉だつた。

「え……」

「話聞いてたら、本村さんと峰が知り合いなのは間違いなさそうだ。まあ、佐藤とつるんでるくらいだから……あり得ない話じやなかつたのかもしねえな」

本当は、さつき彼が言つたようにすべての話を聞いた上で、「そんなはずはない」と言つて貰いたかった。それなのに城崎は峰の言葉を肯定する。

「じゃあ、武雄さんが別れたがつてるつていうのも……」

「信じがたいけど、間違いないんじゃねえか」

返答に鈴は絶句した。

「本村さんって考えることが表に出にくいからな。鈴に気付かれないところで、そんなことを考えていたのかもしだねえ。だからって峰に話すのはあんまりだ」

鈴は今までのことを思い出した。何が悪かったのか思いを巡らすと、自分の非がいくらでも浮かんできてしまう。

そんなことを考えていると、玄関からチャイムが聞こえた。どうやらピザが届いたようだ。城崎は一旦鈴から離れると勘定を済ませ、テーブルの上にそれを置く。

温かく美味しそうな匂いが部屋に漂つたが、さっきまで空腹を訴えていた城崎はピザに手を付けようとはしなかつた。鈴が食事をとれる状況ではないとわかつていたのだろう。

「どう、しよう」

鈴はスカートをぎゅっと握りしめ俯いた。

「やだ、武雄さんと別れたくないよ……！」

初めて愛し合えていると実感できたのだ。ようやく手に入れることができたと思っていた愛情が偽りだつたら、もう立ち直れないかもしだねない。

「武雄さんに、確認する」

鈴は携帯を握りしめた。どんな事実であれ、本村の話が聞きたい。考えが聞きたい。やり直せる

余地があるならやり直したい。

しかし、城崎がそんな鈴の携帯を奪う。

「もう止めろよ」

城崎は静かな声で言つた。

狼狽える自分とはあまりにも対照的な落ちついた声。

何を止めろと言つてはいるのかわからず彼を見ると、城崎の手が伸びてきて、鈴の頬に触れた。

「何度男に傷つけられたら気が済むんだ。もう止めろよ」

「止めろって、でも、悪いことしたなら私、謝りたい。何が原因か聞きたい。直せるところは全部直すから、だから、だから、だから」

別れたくない――

その言葉に城崎が鈴の頭を軽くはたいた。痛くはないけれど、驚いてぶたれた場所を押さえる。果然どしたまま城崎を見ていると、彼は言つた。

「鈴は鈴じやねえか。何で変わらなきやいけねえんだよ」

その言葉は勢い良く、鈴の心の中に流れ込んできた。

「思つてたんだよ。鈴は本村さんと付き合つてから、かなり変わつた。良い影響も受けてるとは思うけど、何でそこまで鈴が無理して相手に合わせなきやいけないのかわからねえ。……別に鈴は本村さんのために生きてる訳じやねえだろ」

子ども頃から強くて逞しくて格好良くて、間違つたことが大嫌いだつた城崎。彼の言うことはいつも正しく、迷いだらけの自分を導いてくれた。

そんな城崎の言葉に、鈴の心がブレ始める。

そこにあるのは、ある種、盲目的ともいえる信頼。

――それが、城崎が城崎らしからぬ言葉を紡いでいる現実を見過ごさせた。

「俺は昔から鈴のことを知つてゐる。たしかにヘマはするけど、俺は鈴のことが嫌いじゃねえよ」

城崎の手が鈴の手の平を包み込む。冷たい指先が皮膚を撫でる。

「もう良い、別れろよ」

鈴にとつて絶対的な存在である城崎の言葉に、鈴の心は打ち抜かれた。ここまで言わされて彼の言うことを聞かなかつたことは、恐らくない。

「……や、やだ……やだ、やだ……！」

しかし鈴は頷けなかつた。自分を追いつめる言葉しか吐かない城崎から離れて首を横に振り続ける。

「別れたくないよ……！」

だつて、武雄さんが好きだもん……つ、武雄さんと一緒にいたい、一緒にいたいよ！」

そんな鈴を城崎が追い、必死で背けようとする鈴の顔を押さえつけた。

「いつもいつも捨てられるまで尽くして傷つけられて、お前それで良いのか。先は見えてるんだ、にいたちじやない!!」

「そのセリフ、隼人にいにだけは言われたくない……つ！ 私のこと、誰よりも傷つけたのは隼人

にいたちじやない!!」

鈴の脳裏に過去の記憶が蘇る。

「そうだ、一番酷く裏切つたのは――」
「我を忘れて叫んだ鈴を前に、城崎は落ちついたものだつた。まるでそう言わることがわかつていたかのようだ。ただじつと、立ち上がつた鈴を見上げてゐる。
城崎の真意がわからなくて不安が芽生えると同時に、取り乱した自分が情けなくなつて顔を押さえた。こんなにも過去を引き摺つてゐる自分を、よりによつて城崎の前で晒してしまふなんて。
「……だつたら」
そんな鈴に城崎は言う。
「もう恋愛なんかするな」
あまりの言葉に、鈴は硬直した。

城崎がそんなことを言うなんて思いもしなかつた。

「恋愛したって意味ないだろ」

城崎はテーブルの上に置かれていたピザを手に取り、鈴に押し付ける。訳のわからぬまま受け取ると、城崎が車のキーを持ち上げ、「帰るんだろ、送つてくから」と、鈴の横を通り過ぎた。普段通りの城崎に、なお一層取り乱した自分が恥ずかしくなる。

思い出さないように、胸の奥に押し込めてきたことだったのに、こんな所で吐き出してしまうなんて。

「鈴、行くぞ」

気持ちの切り替えができず固まつたままの鈴を彼は振り返って、やはり冷静にもう一度そう言つた。

4

自宅に戻った鈴は城崎に渡されたピザをテーブルの上に置き、ソファに寝転がつた。

『もう恋愛なんかするな』

頭の中で反響する言葉。

城崎は昔から鈴の恋愛事に、ほとんど口を出さなかつた。その手の話題を好まないことと、城崎

自身が人に胸を張つて言える恋愛をしていないことが理由だらう。

だから鈴がどんな男に引っかかつても、別れた後に「仕方がねえ奴だなあ」と励ましたり慰めたりしてくれる程度だつたのに。初めてぶつけられた言葉が、この先も一生、まつとうな恋愛をすることができないという予言に聞こえた。

本当に本村と別れるしかないのだろうか。他に道はないのだろうか。必死で考えるけれど、城崎の声が思いついた答えをすべてかき消していく。

困つた時にはいつだって手を差し伸べて助けてくれていた城崎。彼の言うことを聞かずに痛い目に遭つたことが一体何度あつただろう。その信頼が、本村との関係に影をおとす。

「武雄さん……」

週末になればまた本村に会う。彼は普段通り笑つてくれるのだろうか。それよりも自分は、彼の前で笑えるのだろうか。

鈴はしばらく天井を見つめた後、壁の方へと視線を送る。そこには本村に貰つたモン・サン＝ミシェルの写真。鈴はその写真に誘われるよう起き上がつた。冷たい額縁に納まつた写真は、こんな時でさえ鈴の心を温めてくれる。

今度は自分が笑顔で収まる写真を手に取つた。これは去年、鎌倉旅行をした時に撮つたものだ。自分の笑顔からは本村への愛情があふれ、撮影者の彼もまた、自分を大事に思つてくれているのがわかる一枚。

その写真を見ているだけで涙が滲んだ。

「……別れたくないよ……」

涙がこぼれて写真に落ちる。本村との思い出が鈴の中から溢れ出し、峰や城崎の言葉を凌駕する感情が、鈴の中で渦巻いた。それは、鈴の力となつて携帯へと手が伸びる。

「やっぱり、武雄さんに直接聞こう……」

何を言わても、傷ついても良い。彼の気持ちもわからないまま別れるのだけは嫌だ。

鈴は写真と携帯を交互に見つめ、意を決してパチンと携帯を開いた。彼にすべて聞くのだ。

「聞いてどーすんの？」

そこで、自分しかいないはずの部屋に声が響いた。あまりのことに鈴は写真立てをその場に落とす。衝撃にガシャンと大きな音を立てて、写真立てのガラスが割れた。

「こ、亘太……」

声の方角へ視線を向けると、そこには峰がいて、鈴は驚愕きょくがくに目を見開く。何故、と言う前に彼は部屋の鍵を掲げた。昨日合鍵を彼に取られたままだったのだ。その上、写真に夢中になるあまり、彼の侵入に気づけなかつたらしい。

鈴は携帯が手から滑りそうになると、ぎゅっと握りしめ、背後に隠した。

峰は無遠慮にリビングに入り込み、鈴が眺めていたモン・サン＝ミッシェルの写真と、ガラスが割

れた写真立てを眺める。

彼は耳のピアスを弄りながらにやりと笑つた。

「本村サン写真撮るんだ？ それは知らなかつた」

くつきりと骨が浮き出た峰の右手が、床に落ちた写真立てを持ち上げる。

写真が汚されるような気がして、鈴は彼から写真立てを奪い取つた。しかし、彼の顔に張り付いている怖気を感じるような笑みまでは奪うことができない。

「帰つてよ！ もう来ないで、私は亘太と付き合う気なんか無いんだから！」

「お前の意志なんか聞いてねーし。お前は黙つて俺の言うこと聞いてりやいいんだよ」

峰は軽く鼻で笑つて、ソファの脇に投げ捨てられていた鈴のバッグから財布を漁つた。

「亘太！」

慌てて手を伸ばすが返つてきたのは、投げつけられたバッグだけ。峰は財布の中から手早く金を抜き取ると、ジーンズのポケットにねじ込む。

「なあ、鈴、俺つて見る目、超あるんだわ」

そして、峰は自分のこめかみをとんとんと指先で叩きながら言つた。

「本村サンのその写真、素人の腕じやねえな。プロ？ セミプロ？」

粗暴に見える峰だが、これでも芸術に造詣の深い家の出で、幼少時から鑑定眼を鍛えられている。骨董市で掘り出し物を見つけては、人に流すなんてこともしていたので、良い物に対してもめざとい

のだ。

「そ、それは……亘太には関係ないじゃない」

「写真を撮るのが大好きなのもわかるわ。へえ、なるほどねえ……」

品定めするよう峰は目を細め、モン・サン・ミシエルの写真を眺める。やがて彼は指先でトントン、と写真を叩くと、信じがたい言葉を口走った。

「じゃあ、両腕が効かなくなつたりしたら、メッチャ落ち込むかもな」

「……っ!?」

驚く鈴の眼前に自身の両手をかざし、からかうように手の平を開閉する。

「亘太、まさか」

「なんつーか、折角忠告してやつてんのに言うこと聞かねえ鈴を見てるとイライラするんだわ。俺に逆らつたらどうなるか、思い知らせたくなつてきた」

「なんでそんなこと言うの。だつて武雄さんと友達なんでしょう！」

「別に？ ダチの腕折るなんて朝飯前だけど？」

ただの脅しだと斬り捨てるには峰の素行が悪すぎる。

鈴の背中に冷たい汗が伝つた。

「鈴が言うこと聞かないのが悪いんだぜ？ だから本村サンにまで被害がいつちまうんだ。全部お前のせいだからな。……写真撮れなくしてやるよ」

そこまで言うと用は済んだといわんばかりに玄関に向かつて歩き出した。鈴は慌てて峰の体にしがみつき、それを止める。

「止めて！ あの人に手を出さないで！」

「うるせえ」

「お願ひだから！」

峰は自分勝手に^{たやすく}人を傷つける。本村の腕をダメにすることに罪悪感なんて抱かないだろう。ようやく撮れるようになつた写真を、あの見ているだけで心和む綺麗な写真を、自分のせいで撮れないようにはしたくない。

鈴は必死で懇願した。
こねがん

「お願い、何でも言うこと聞くからそれだけは止めて！ 武雄さんにだけは手を出さないで……！」

鈴の叫びに峰は足を止める。

振り返つた彼は鈴を試すように見つめ、「だったら、別れる」

と命令した。

予想していた答えではあつたが鈴の表情は歪み、やがて^{うつむ}俯く。それを不満に思ったのか「じゃあ良いよ」と峰がふたたび鈴に背を向ける。

「待つて！ わかつた、わかつた……！」

行かせまいと彼の服を掴んで、鈴は降伏の意を示す。峰はすかさず振り返り、確認するように問い合わせてきた。

「別れるんだろうな？」

「別れる……」

「その後は俺と付き合うんだ。いいな？」

ぎゅっと握りしめた拳が痛い。鈴は唇を噛みしめ、ゆっくりと頷いた。

「言葉にしろよ」

だが、峰はそれに満足しなかったようだ。

苛立つた彼の声に顔を上げることができないまま、「わかった」と返事をした。

「それでこそ鈴だ」

ようやく峰は満足げに笑い、鈴の頸^{あご}を掬^{すく}い上げた。

「忘れんなよ。俺が手を出す出さないに関係なく、どうせお前は捨てられるんだ。本村サンのために身を引いただなんて思い上がるな」

無造作に押し付けられた唇。

抵抗しようと持ち上げた手を、鈴は握りしめ、そして下ろした。

本村以外の人とキスしてしまった。もう彼に愛して貰う資格さえ無い。

峰が帰った後、鈴は床の上に座り込み、しばらく動けなかつた。

この期^こに及んでもなお、本村とは別れたくない。しかし別れなければ、峰が本村に危害を加える可能性がある。それに、こういったことは、これからも続くのかもしれないと鈴は思った。

峰も含めて今まで付き合ってきた男たちは、性格に難があり。

今回のように彼らがいつ鈴の前に現れ、その幸せを壊そそうとするかわからないし、本村を巻き込み、傷つけることだつて有り得るかもしないのだ。取り返しのつかないことにだつて、なるかもしない。

「不釣り合いなんだな、ホントに……」

そんなことを考えていると、ふいに携帯が鳴る。

鈴はハッと顔を上げ、違うようにして手を伸ばした。そこには先ほど別れた城崎の名前が表示されており、知らず落胆する。こんな時でもなお、自分は本村を望んでしまっているというのか。

鈴は電話に出るかどうか躊躇した。あんな話をした後だというのに、どうしてまた電話をかけてきたのだろう。何か伝え損ねたことでもあつたのだろうか。だけどあれ以上、何を話すというのだ。聞きたくない言葉を、また言われるのではないかと怖かった。しかし、城崎は繰り返し電話をかけてくる。自分が携帯を見つめたまま、動けずにいることを知っているかのように。鈴は、覚悟を決めて電話を取った。多分、鈴が電話に出るまで、かけ続けるだろうことがわかつていたから。

『……鈴？ あのさ、やつぱ今、一人になるのは危ねえんじゃないかと思つて。嫌かもしんねえけど、今日だけは俺んち来ねえか？ 俺がそっちに行つても良いけど、お前んち、今ちょっとやべえだろ』すると、予想に反して城崎の優しい声が響く。本当に自分を心配している時の声だ。気遣つてくれているときの声だ。

「……っ……」

緊張の糸が切れ、鈴の目から大粒の涙があふれ出した。

『……鈴？』

嗚咽が聞こえないように、奥歯を噛みしめて口を押さえる。何とか城崎にバレないよう。しかし幼なじみには、そんな強がりは通じなかつた。

『……泣いてんのか？』

鈴は返事ができない。言葉を発すれば、さらに歯止めがきかなくなりそうだつたからだ。城崎はしばし沈黙し、やがてつぶやいた。

『待つてろ、今から行くから』

それだけ言つて、鈴の返答を待たず携帯を切る。鈴は声が聞こえなくなつた携帯をしばしの間、耳に当て、やがて力を失つて床に崩れ込んだ。

『するい……っ……』

いつも厳しくせに、ぶつきらぼうなくせに、こんな時だけたまらなく優しい。だからいつも自

分は彼に頼つてしまつ。彼なら自分を救つてくれると信じてしまつ。
鈴はソファにもたれかかり、城崎のことだけ考えながら浅い呼吸を繰り返した。

それからしばらくして、鍵のかかつていな玄関から、城崎が駆け込むようにリビングへ入つて

きた。

虚ろな眼差しで彼を視界に入れた鈴を、城崎は無言で抱きしめる。

「大丈夫だ鈴、落ち着け」

すでに涙は枯れ、泣き叫んでいるわけでもないのに、城崎は落ちつけと言つ。心が虚無になつている時ほど危険なことはないと彼は知つてゐるのだ。

「……武雄さんと別れて、亘太と付き合う」

鈴はなんの説明もせずに、ただ、そのことだけを城崎に伝える。

「そうか、わかつた」

城崎はその言葉を受け入れた。鈴は彼のシャツを握りしめ、ふたたび込み上げてきた涙に肩を震わせる。

城崎に否定されないことで、自分が正しい道に進んでいくような気さえした。

「本村さんには、なんて言う気だ」

「わからない。でも、武雄さんは別れる気なんだから、私から別れましょうって言い出せば早いよ、

きっと。あつという間に終わっちゃうよ……」「……」

峰は信用に足らない人物だが、ハロウインパーティーでの出来事という自分たちしか知り得ないことを知っていたのはたしかだ。本村のことが好きなあまり、これまで受け入れられなかつたが、もう嘘だと否定し続けることはできない。彼が自分と別れたがつているなら、それも受け止めなければ。

本村と直接話し、自分の想いを伝えることができなかつたのが心残りだ。彼のためだつたらどんな努力も惜しまないのに。そう思うほど、彼のことが好きなのに。しかし自分のこんな考え方さえ、彼の負担になつていたのかもしれない。

城崎は鈴の背中を何度も撫で、ふたたび口を開く。

「俺と付き合うって言え」

「え……？」

涙が滲んだ虚ろな眼差しで見上げると、彼は真剣な表情をしていた。

「峰と付き合うなんて言つたら面倒なことになると思う。俺だつたら現実味あるし本村さんも安心して別れられるかもしれないから」

本村が本当は別れたいけれどそうしなかつた理由に、鈴に対する気遣いが含まれているのであれば、親しい城崎と付き合うことになつたと話せば、本村の気持ちを軽減させられるかもしれないとい

うことだろう。

しかし、あんなにも鈴と城崎の関係を危ぶんでいた本村に、それを言つて良いのか鈴は迷つた。

（……迷うのも、おこがましい話だよね……）

すでに彼は自分に想いがないのに、そんなことを考へるなんて自惚れにも程がある。だけど考えてしまうのだが。

「あとな、佐藤が絶対探りを入れてくる。その時は何も話さず『ごめんなさい』を繰り返せ。こつちの事情は何も話すなよ」

淡々と話を進める城崎の言葉を聞きながら、鈴は本当にこれで良いのだろうかと自問する。

城崎はそんな心許ない鈴をさらに強く抱きしめた。

「大丈夫だ、俺がいる。俺だけはずつと鈴の傍^{そば}にいてやる」

それは子どもの頃によく聞いた、だけど成長してからは久しく聞くことがなかつた、城崎の言葉だつた。

鈴は手を伸ばし、城崎の背中に触れる。そのままぎゅっとしがみつくと、「大丈夫だ」と彼がまたつぶやいた。

「もう恋愛なんかするな……。俺が言えた義理じやねえけど、傷つく鈴は見たくなえよ。一緒に歩いてはやれねえけど、一生傍にいてやるから……何も変わらず昔と同じようにいてやるから。本村

さんは、別れちまえ。それが、お互のためにもなるんだよ」

鈴は城崎の肩越しにモン・サン＝ミシェルの写真を見つめる。このまま本村と付き合っていれば、彼に被害が及んでしまうから、駄々をこねず別れるのが最善の道なのだ。

もう彼の写真に自分が写ることがないと思うだけで、胸が苦しくなるけれど。

それから鈴は、メールで本村を彼の自宅近くのファミレスに呼び出した。

『良いけどどうしたの？ どうせなら俺の家に来たら？』

『すみません、できればファミレスの方で』

『そう、わかった。すぐに行くよ。待つてて』

夜分遅く、しかも突然の呼び出しにもかかわらず、本村はすぐに来てくれる。メールもいつもど変わらない優しい文面。それを見ていると、鈴の中でふたたび大きな迷いが生じた。本村と何も話さないまま、話を進めてしまって良いのだろうか。

考えてみると、自分から恋人に別れを切り出すのは初めてだ。緊張と動揺と、いつまで経つても晴れない心のざわめきに汗が滲む。すべてがあつという間の出来事で、思考はいまだについてきていない。

そんな鈴の心情を察したのか、いつまでも握りしめていた携帯電話を城崎が奪い取り、パチンと閉じた。

「すぐ来るぞ、本村さん」

人がまばらなファミレス内。城崎は頼んだコーヒーを口に含む。せめて一晩考える時間があれば、心の準備もできたかもしれないのに、「迷いがでかくなるだけだ」と城崎に一蹴された。

鈴の心を置きざりにしたまま、何もかもが勢いよく決まっていく。

程なく入り口のドアをからんと開けて長身の男が姿を見せた。本村だ。

彼は人が少なく見通しの良い店内で、すぐに鈴の姿を見つけてくれる。そして、隣に腰かける城崎を見て、一瞬で顔を強ばらせた。

何もかもが変わらない。いつもの本村だ。

「……どうしたの？」

本村は城崎を気にしながらも、とりあえず鈴の正面に腰かけた。

さつきまでは自分がしなければいけないことがわかったのに、いざ本村を前にすると言葉が出てこない。彼の顔を見ることもできなくて、鈴は下を向いたまま唇を噛みしめる。そこで、スカートの上で固く握っていた鈴の手を、城崎が包み込んだ。

「鈴」

強めの口調で言葉を促す城崎。それでも鈴は言えなかつた。

(――…別れたくない。やつぱり別れたくない！)

本村との思い出が蘇り、心の中でそう叫ぶ。そして鈴は思った。話そと。すべて話して彼の言葉を聞いて、それから、それから――

「俺たち、付き合うことになつたんです」

だけど、城崎の言葉がすべてを切り裂いた。いつまでも話せない鈴に代わって、城崎がそう言つたのだ。

「……え」

本村が上擦った声を上げる。その目は驚愕に見開かれ、中途半端に唇を開いたまま彼は固まつた。(どうして勝手に言つちやつたの！)

鈴は泣きそうになりながら城崎を見る。だけどそこには城崎の厳しい眼差しがあつた。何のためにここに来たんだ。その目が鈴にそう訴えかける。もう後戻りできないのだと言うように。

「……意味が、わからない」

やがて、辛うじて出した本村の言葉。峰や城崎の話が正しければ、本村は安堵し、あつさり自分と別れるはずだったのに、彼はこの事態を理解することができず、もちろん突然の別れに応じる気配もなかつた。

自分は何か大きな失敗をしている。鈍い思考の中でもそれがわかつたが、城崎が発した言葉も、作り上げてしまつた流れも変えることはできず、すべてはメキメキと嫌な音を立てて動き出す。

「すみません、俺たち付き合うことにしたんです」

「なん、だつて？」

「俺達は元から近い距離にいました。だからこの歳になるまで気づけなかつた。俺は鈴のことが好きだつたんです。それから、鈴も。勝手なことを言つていいのはわかつてます。ですが、すみません。鈴と別れて下さい」

本村はテーブルに肘をつき、額を押された。しかしすぐに顔を上げて、

「突然そんなことを言われても困る。それに信じられない。鈴、どういうことなんだ？」
と言う。

本村の手が鈴の肩を掴み、小さく揺すつた。今まで見たことがないくらい激しく動搖している。

「た、武雄さん」

「本当に理解できない。先週も何事もなく二人で出かけたじゃないか。悩んでる素振りもなかつたじやないか。それが何で急に……何で！　冗談だろう！」

肩を掴む本村の手が熱い。

「鈴の良心は激しく痛み出した。

彼は何かに怯えるような目をして、鈴の目を覗き込んでくる。その視線から逃れることができず、信じられないよ！　鈴、嘘だろう？　嘘だと言つてくれ……！」

「武雄さ……」

スカートを握りしめていた手をすっと離し、彼に向かって立ち上がる。しかしその手を城崎が押さえつけた。

「誰のために別れるんだ？」

城崎は鈴の耳元で、口早にそうつぶやく。その言葉が、鈴の感情をすべてシャットアウトした。

ああ、そうだ、自分は彼に不釣り合いで、一緒にいたら迷惑をかけてしまう。

溢れ出したものを強引に奥底へと押しやり、込み上げていた熱を一気に冷ます。

城崎は、鈴の肩に乗せられていた本村の手を払うと、見せつけるように今度は自分の腕を鈴の肩に回し引き寄せた。

「こいつはまだ混乱してるんだ。これ以上、追いつめないでやつて下さい」

城崎の言葉に本村は、明確な怒りを孕んだ瞳で城崎を睨みつける。

「俺は鈴と話がしたい。席を外してくれ」

「変な情に流されて、踏ん切りがつかなくなつたら俺だつて困るんです。勘弁して下さい」

「鈴と話がしたいって言つてるんだ」

「鈴は話がしたくないって言つてるんですよ、暗に。こいつのことを一番理解してるのは、俺ですから」

正直、城崎がここまで口を出すとは思わなかつた。彼が言葉を発すれば発するほど、本村が傷つ

けられていく。

鈴は「早くに『すみません』とつぶやいて席を立つた。これ以上傷つく彼を見ていられなかつた。話はそれだけです、ごめんなさい！」

「鈴！」

後を追うように本村も立ち上がり、鈴に手を伸ばすが、城崎が間に割つて入り、本村の行動を牽制する。そのまま、鈴の腰に手を添えて強引に出口に向かつた。

外に出るドアに城崎が手をかけた時、店の奥から、どん、と物を殴るような音が聞こえる。本村がテーブルを叩きつけた音だと感じ取つて、鈴は自分が殴られたような感覚に陥つた。

「武雄さん……別れる気全然なかつた……」

店を出て駐車場まで来たところで、鈴は両手で顔を覆い、そうつぶやく。

城崎は普段と何も変わらぬ表情のまま車の鍵を開けていた。あまりにも冷静すぎる城崎の態度に、何故か寒気がする。まるで、知らない人のようにも見えて二の句も継げなくなつた。

城崎はファミレスを一度振り返ると、鈴を車に乗せ、そのまま発進させる。

駐車場を出る直前に、椅子に深く腰かけうなだれる本村の姿が鈴の目に映り、窓に触れていた手が小さく震えた。

「本村さんと別れるつて決めたのは、あの人が鈴と別れたがつてたからか？」

「え？」

いつまでもファミレスを見つめていると、車を運転しながら城崎が問いかけてくる。

「俺が最初別れろって言つた時は頷かなかつただろ。なのに決心したのは何でだ？ 本村さんを守るため、そしたらどう？ 違うのか？」

彼の鋭い眼差しは、まるで鈴を試すように見つめていた。その雰囲気に呑まれ、鈴はこくりと頷く。

そうだ、自分みたいな女と一緒にいたら、本村に辛い思いをさせてしまうから。だけど本当にこれで良いのか？

「だつたら、本村さんからの連絡、全部拒否しろ」

「え……」

「携帯だよ。さつき見て思つたけど、お前、本村さんの声を聞いたら決心が揺らぐだろ」

赤信号で車を停止し、城崎がこちらへと顔を向ける。

「あと、峰に家の鍵を取られてるんだよな。管理人に玄関の鍵を替えて貰えないか相談しろ。それまでは必要なものと金目のものだけ持つて俺の家に来るんだ」

「隼人にいの家に……？」

「俺は加藤の家に泊まるから自由に使つて良い。とにかく、落ちつくまでは家に戻るな。戻るとしても絶対に俺を連れて行け」

「でも、それじゃ亘太が……」

本村と別れた後は峰と付き合つよう言われているのだ。逃げ出せば、彼の逆鱗(げきりん)に触れるかもしれない。それこそ、本村に危害が及ぶ恐れがある。

「なんだかんだで峰もすぐには行動できねえよ。その間に鍵替えて、態勢を整えた方が良いに決まつてるだろ。とにかく、『何も考えず』に『俺の』と言ふことを聞いておけ。考えたつて、ドツボにハマるだけなんだから、お前は」

俺を疑うな。彼はそう強調する。

「わかつたな？」

鈴は浅く頷いて、形容しがたい恐怖感に顔をそらした。一体何を恐れているのか、鈴にもわからぬない。

城崎は青信号に変わつたことを確認し、車を発進させる。鈴はドアにもたれかかりながら、流れていく景色を眺めた。

「大丈夫だ、お前は間違つてない」

どんなに辛くとも、これは本村のため。鈴は自分に言い聞かせる。

だけど一時は自分の決断に自信が持てるものの、すぐに本村の眼差しがちらつく。

『嘘だと言つてくれ……！』

こだまする声に、鈴は耳を押さえ体を小さく丸めた。